

グループホームという共同生活の視点

(2005年 第2回日本グループホーム学会シンポジウム発表原稿)

牧野賢一

はじめに

グループホームをただ単に福祉の制度として考えると、この問題の重層的な意義を見落としてしまう。ある心理学者は「人の人生は人類の歴史を辿る」といっているが、人類は常に心のありようの中で進化を遂げた唯一の動物であると考えられる。その過程はただ単に段階として捉えるのではなく、具体的な人間の生活自体の中で一体的に捉える視点が必要になると考える。そのためにも、グループホームを、これまでの人間の歴史、心のありよう、社会の現象など様々な視点を結集して、考察する必要があると考える。

1、人類史としての考察

人類前史を遡ると、約7,000万年前に誕生した靈長類は、約3,800万年前には群れでの生活が始まり、樹上から地上へと生活の場が変化していく。約600万年前のアフリカでの人類の誕生は、二足歩行によってもたらされたとされるが、それから約1万年前の農耕文化による定住生活までののはるか長い時間の中で、移動と環境適応によって世界各地に人類が分布してその存在を維持してきた。いわば、ダーウィンの人類三つの命題である、二足歩行、道具による道具の作製、脳の増大のなかで、移動と交流による多様な文化の創造の時代である。この長い進化の歴史を経て、農耕文化以降の人類は富と権力を背景にした社会組織の複雑化の時代になる。人類史における家族は、一夫多妻制から一夫一婦制への生物学的な進化の中で、父親の役割が、「生物学的」なものから「社会的」なものへと、社会組織の発展とともに変化していく。

人類における共同生活は、群れという個体維持の生物学的な必然性を基盤に、移動と交流によって様々な文化が創造され、やがて、定住化による社会組織の発展とともに、家族という社会の構成員としての共同生活を確立してきたと考えられる。

グループホームは、現代においては、家族以外の他者との共同生活という独特と見られがちな形態ではあるが、人類史的には他者との共同生活は、社会構成員としての家族という共同生活の発展に向かう長い間に経験した、いわば生活の原型ともいえる。

グループホームのような他者との共同生活が、やがて、人が社会の構成員として家族を構築するための道のりと考えるなら、障害者のためだけではなく広く必要性を考えられるかもしれない。

2、心のありようとしての考察

心理学者マズローの欲求の段階説では、人間の欲求は、生理的欲求、安全の欲求、親和の欲求、自我の欲求、自己実現の欲求であるといわれている。生理的欲求と安全の欲求は、人間が生きる上で衣食住等の根源的な欲求、親和の欲求とは、他人と関りたい、他者と同じ

ようにならぬ集団帰属の欲求で、自我の欲求とは、自分が集団から価値ある存在と認められ、尊敬されることを求める認知欲求のこと、そして、自己実現の欲求とは、自分の能力、可能性を發揮し、創造的活動や自己の成長を図りたいと思う欲求のことである。

これらの欲求は人類の進化の過程で獲得したと考えるなら、人類前史という長い時間の中で、生理的欲求をより安全に獲得するために、樹上における単独夜行生活から、地上における群れでの昼行生活へと進化を遂げたと考えられる。人類史の時代に入り、二足歩行による移動と交流の文化の中で、その根源的欲求とともに、親和の欲求や自我の欲求を充足させてきたことが考えられる。この時代は、狩猟、採集中心の生活で、集団同士の大きな争いもほとんどなく、共同生活におけるやすらぎの時代であったのだろう。この時代に重度障害者との共生を示す化石などがいくつか出土されている。

農耕文化による定住化による社会組織の発展により、富と権力をめぐっての争いの時代になり、社会における階級制度や戦争による人の心の抑圧は、自己実現の欲求をもたらす時代になったと考えられる。

グループホームにおける共同生活は、根源的欲求を充足させることは基盤であるが、人が人たるためには、地域社会への移動と交流を通じて、親和の欲求や自我の欲求を充足させる必要がある。さらには、個別化という社会における自己実現の欲求にも対応していくなければならない。

3、ライフサイクルとしての考察

心理学者ユングは、人生を太陽の運行になぞらえて、少年、成人前期、中年、老人の4つの時期に分けた。少年期と成人前期は午前（前半）で、中年期以降が午後（後半）であるとし、午前は上昇期にあり午後は下降していく、この転換期である中年期への移行が人生最大の危機なるになるとした。さらに、心理学者レビンソンは、この理論を実証化し、成人への過渡期から4・5年ごとに転換期がおとずれ、成人前期からの生活構造を、成人への過渡期、大人の世界に入る時期、30歳の過渡期、一家を構える時期、中年期は、人生半ばの過渡期、中年に入る時期、50歳の過渡期、中年の最盛期、老年への過渡期として、どんなことに時間とエネルギーを使い、どんな世界を持ち、どんな人と関係を持つかなどを考察した。レビンソンによれば、7年以上持続しうる生活構造はないとされ、この構造を変える時期が危機的な時期とした。

グループホームの利用は、早くは成人への過渡期から始まり、遅くは老年期からの利用まで、長い人生の中で、共同生活を考えていかなければならない。ユングやレビンソンが示したライフサイクルの中で、中年までの時期を個体としての発展や社会への定着の時期、中年期以降を個性化の時期として、生き方や価値観の転換が必要になるとしたが、グループホームにおける共同生活を、ライフサイクルに合わせた支援として構築する必要がある。

4、居住文化としての考察

日本における縄文期の竪穴式住居や囲炉裏などにみられる共同生活の原型から、定住化による社会の中で確立した社会の構成員としての家族構成や生活、それに応じた民家の変化、

さらには江戸時代の共同生活と家族生活の複合としての長屋文化。近年においては、成人への過渡期に家族から自立し社会に入る中で生まれた徒弟制度、近年における下宿屋など、これまでの人類史的考察や人の欲求、ライフサイクルの中で、みごとに居住文化が生まれてきたといえる。

現代における家族関係の変化や地域社会における孤立化は、共同生活という居住文化を一見見えなくしているが、家族関係や地域における社会関係の喪失は、新たな共同生活の居住文化をつくりだす下地になるのではないだろうか。そうした中で、グループホームは福祉という分野での特異な存在ではなく、人の心にどこか受け入れをつくりだすものと考える。

5、グループホームの実践的考察

入所施設福祉という社会の周縁部にある大規模な共同生活から、社会の中心部との間に存在し、中心部と周縁部を結び付ける役割を担うグループホームは、単に障害者との共生社会を目指す社会福祉的な制度を越えて、その実践においては人の暮らしのありよう想起させるにたるものを見出しつつある。

現在のグループホームにおける実践的機能を考えると次のようなものとなる。

1、家族的機能の補完

共同生活において根源的欲求を満たし、安心や安定をもたらす。

2、生活経験の構築

地域社会において常に移動と交流が行われ、親和や自我をもたらす

3、家族の構築

恋愛や結婚、従来の家族との主体的な関係構築など、新たな家族関係をもたらす

4、社会への定着

個を確立し、生き方や価値観の転換をもたらす

実践的機能から導かれるグループホームの類型を次のように考えてみる

1、成人期への過渡期を支える家族機能型

家族の機能低下を補うものとして、児童養護施設におけるファミリーグループホームのようなもの。

2、成人前期を支える生活経験型

地域社会での生活コーディネートを中心とした支援

① 非身体介護タイプ

② 身体介護タイプ

3、成人前期から中年期を支える独立生活型

地域社会での独立を中心とした支援

まる独立性のある住環境（ワンルームアパートなど）を提供、サテライト方式、夫婦生活や子育て対応

4、中年期から老年期を支える安定生活型

家族的つながりと地域社会とのつながりを中心とした支援